



新川達郎

未来の京都をイメージするとき、どのような都市の姿が浮かんでくるのだろうか。何年後の未来なのか、社会経済政治条件をどのように設定するのか、などによって、その結果は大きく異なってくる。とはいえ、古の都を、永遠の都にというのは、多くの京都市民や、京都に思いを寄せる人々にとって共通の願いと言える。これを今風の言い方にするなら、持続可能な都市と言うことになるであろう。

持続可能な都市のためには、過去の蓄積は重要であるが、それだけでは、持続できる保証はない。むしろ都市としての蓄積を活かしながら、持続可能な都市への刷新を進めて行かなければならない。都市の伝統や蓄積を大切に振り返りながら、その枠に留まることなく、新たな価値を付加していくことを考えるのである。今進められている『京都創生』も基本的に同じ観点から考えられており、未来に向けての持続可能な都市形成を、絶えざる自己刷新の継続によって、目指すことなのである。

仮に京都が将来においても『都』であり続けようという目標を設定す

にいかわ たつろう 同志社大学大学院総合政策科学研究科長。早稲田大学大学院政治学研究院科修了。東北大学大学院情報科学研究科助教授を経て、1999年4月から同志社大学大学院総合政策科学研究科教授。専門分野は行政学、地方自治論、公共政策論。京都市政策評価制度評議会会長、京都市市政改革懇談会座長などを務める。著書に新川達郎ほか編『行政と執行の理論』東海大学出版会（1991年）、田中一昭ほか編著『中央省庁改革』日本評論社（2000年）、新川達郎ほか翻訳『比較官僚制成立史』三嶺書房（2003年）、新川達郎ほか著『自治体改革第2ステージ』ぎょうせい（2003年）などがある。

るとすれば、現状からの都市刷新だけでは不十分である。それに相応しい都市の姿を想定しつつ、その実現に向けて、都市の条件整備を直ちに始めていかなければならない。未来の京都の姿について単純化して言えば、人々が集まるところ、何であれそこに来ることを余儀なくさせる魅力にあふれる都市ということであろう。単なる観光集客ではない、そこに住む人にとって、またさらに多くの人々にとって魅力的な都市としての存在を、京都は、多面的につくりあげていかなければならない。

京都の都市政策の具体的な提案については、本誌の諸論稿に譲ることにしたいが、持続可能な『集いの都』を将来の都市の姿と仮定して、バックキャストिंगをしつつ考えてみると、現在の延長線上では未来を切り開きにくいものが多い。たとえば、国際観光文化都市、歴史都市あるいは文化首都といった魅力すら、現状維持やその延長上にあつては、もはやそれで十分な都市の魅力を遠い未来にわたって提供できるものとは考えられないかもしれない。つまり、集いの魅力を創造できる都市文化の刷新を迫られているのである。都市経済も従来型産業の延長上での発展ではなく、新たな集いを生み出すような産業イノベーションに向かわなければならないのである。

こうした都市のイノベーションを創出していく基本的な条件になりそうなのは、多様な都市機能を重層的に備えていること（コンプレックス）、対立する諸価値を内包し共生を可能にすること（コンプリヘンシブ、コハビテーション）、そしてそれら多機能性や多価値性が新しい価値を創造する場があり新たな都市伝説を生み出すこと（クラスター、コンテキスト）ではないだろうか。都市政策のすべてが、そうした観点から、再構築されていく必要があるし、都市政策を支える都市経営力の刷新も同時に求められている。

京都にはそうした新しい都市伝説を生み出し続ける力がある。京都の市民力，企業力，行政力，そしてそれらを結ぶ協働の力は，伝統を基礎にイノベーションを繰り返し蓄積し新たな都市創造を成し遂げていく大きな可能性を内包していると確信している。